



mizkan
やがて、いのちが変わるもの。

環境への取り組み 2025年度版



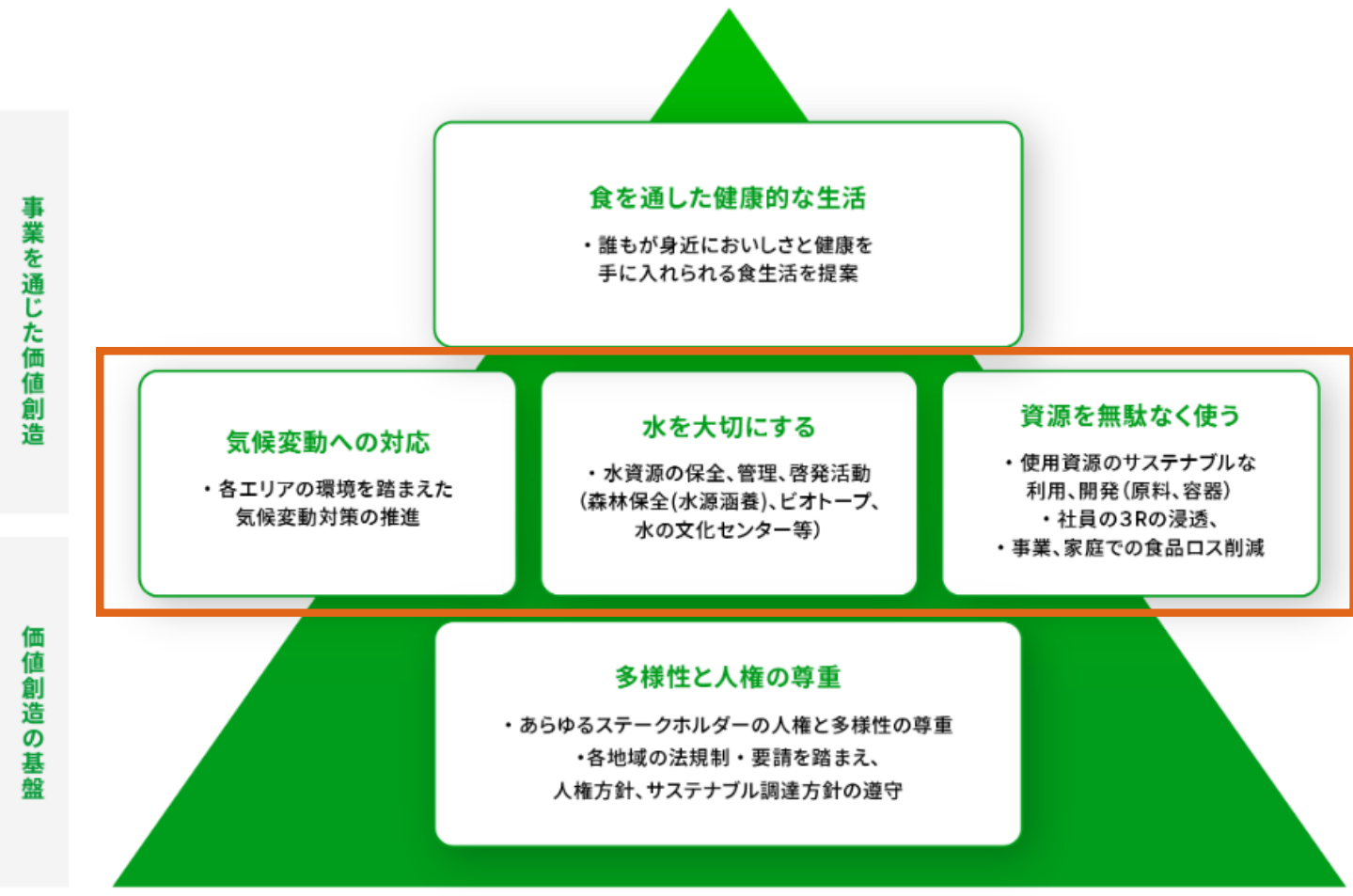
5つの重要課題（マテリアリティ）

グローバルサイトでは、私たちのサステナビリティ方針を公開しています。この方針は、未来ビジョン宣言の実現に向けて、気候変動や水資源の枯渇などの大きな環境変化にどう対応していくかをまとめたものです。

サステナビリティ方針はこちら
→<https://www.mizkanholdings.com/ja/sustainability/>

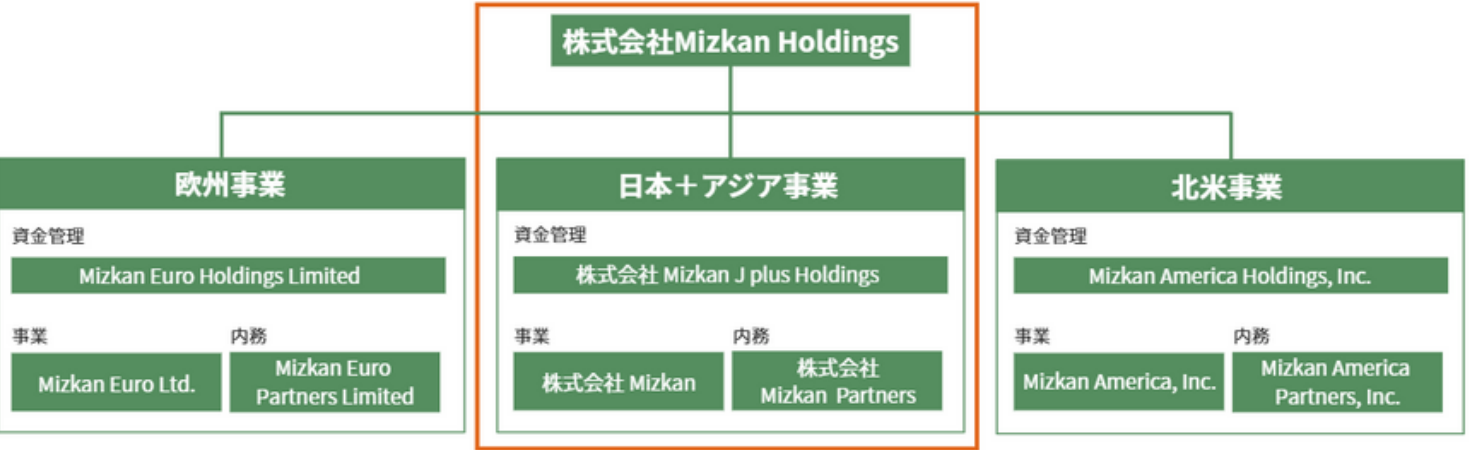
私たちは、サステナビリティの観点から未来ビジョン宣言2024をブレイクダウンして、ミツカンの歴史・内部環境の再確認と、外部環境の変化の整理を行い、ビジョンの達成に向けて、ミツカンが今後中期的に取り組むべき5つの重要課題（マテリアリティ）を特定しました。

ミツカンは、ビジョンの実現に向けて、「食を通した健康的な生活」をお客様への提供価値としながら自社の成長を目指します。
また事業を通じて「水を大切に使う」、「気候変動への対応」、「資源を無駄なく使う」を実践することで、自然環境・社会への価値を創出しながら、同時に事業基盤を大切にしていきます。さらに、それらの価値創造の源泉として、従業員をはじめ、ビジネスパートナー、地域社会などステークホルダー「多様性と人権の尊重」を継続していきます。



環境マネジメント体制

環境管理に関わるルールを策定し、環境負荷低減の活動を推進しています。国内の環境マネジメントは、(株) Mizkan Partners の品質環境部が課題調整と実行および全体のとりまとめを行っております。



対象組織（2024年度）

法人：(株) Mizkan Holdings、(株) Mizkan J plus Holdings、(株) Mizkan、(株) Mizkan Logitec、(株) Mizkan Partners、(株) 中埜酢店、(株) Mizkan Asset、(株) ZENB JAPAN

＜常温品工場＞
(株) Mizkan（栃木工場・館林工場・大阪工場・三木工場・美濃加茂工場）
＜チルド品工場＞
(株) Mizkan（館林工場・三木工場・美濃加茂工場）

対象期間

2024年度（主に2024年3月～2025年2月）
※取り組み事例は一部2025年度のものも含みます。

対象

環境保全に関する側面

発行日

2025年10月
※2025年9月時点の情報を掲載しています。

環境の重要課題

01 気候変動への対応

・各エリアの環境を踏まえた 気候変動対策の推進

目標

地球温暖化防止に向け、CO₂排出量を低減する為に中・長期の目標を立て、達成に向けて様々な施策に取り組んでいきます。

日本国内拠点

2030年までにCO₂ 50%削減
(2018年比 Scope1・2)



持続可能な物流を目指して ～ミツカンが取り組む「環境にやさしい物流改革」～

近年、物流業界ではドライバーの働き方改革（2024年問題）や、環境への負荷を減らすための取り組みが求められています。そんな中、持続可能な物流を実現するためのさまざまな工夫を行っています。

100kmの壁を越える！～神奈川への配送を見直し～

これまでは栃木県や群馬県の物流センターから、神奈川県全域へ商品を運んでいました。1日に約100km走り、さらに日によって荷物の量が変わるため、トラックの確保が年々難しくなっていました。

そこで、神奈川県厚木市に新しい物流拠点を設置し、在庫をあらかじめ持つ仕組みに切り替えました。これにより、栃木から厚木への大型トレーラーでの計画的な輸送が可能になっただけでなく、西日本の工場から直接出荷する配送ルートへの導入、配送距離の短縮によるCO₂排出量の削減といった効果が生まれました。

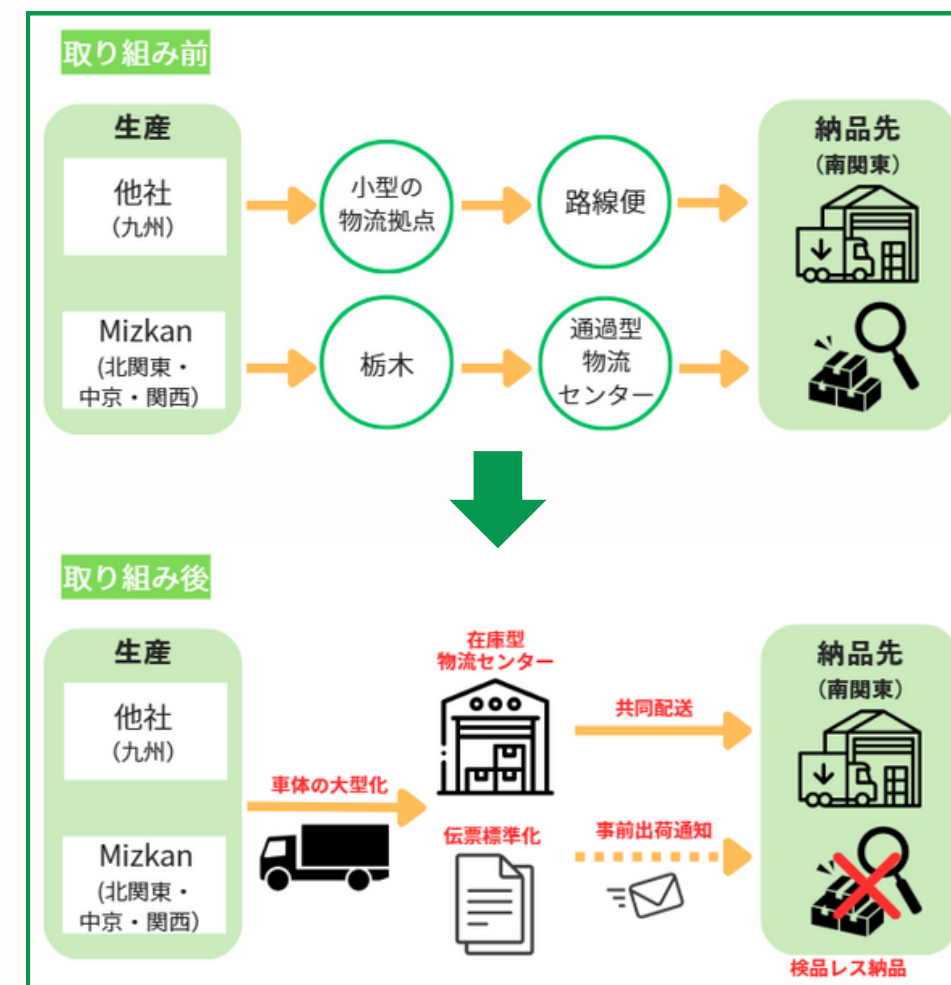
伝票も環境配慮へ！～紙の使い方を見直し～

厚木の新しい拠点では、他社との共同配送・保管も視野に入れて準備を進めました。

その中で、従来の「ミツカン独自の複写式伝票」から、業界で広がりつつある「A4サイズのカット紙伝票」へ切り替えました。これにより、紙の使用量削減だけでなく、スムーズに共同配送できる体制の構築、倉庫や配送会社での作業効率の向上など、環境にも業務にもメリットが生まれました。

現在は他社と連携し、共同配送・保管を実施しています。企業同士が協力し合い、環境にやさしく、安定した物流の仕組みを築いています。これらの取り組みが評価され、ミツカンを含む9社の取り組みが、2024年度の「グリーン物流パートナーシップ会議」にて、最高位となる国土交通大臣表彰を受賞しました（2024年12月）。

令和6年 グリーン物流優良事業者表彰にて最高位である国土交通大臣表彰を4年連続で共同受賞 | ニュース | 鈴与株式会社



環境の重要課題

02 水を大切に する

- ・ 水資源の保全、管理、啓発活動
(森林保全(水源涵養)、
ビオトープなど)

目標

水を大切にすべく、各拠点の水
使用量を公表し、削減目標を設定し
ています。

日本国内拠点

2030年までに国内生産拠点の
水使用量原単位10%削減
(2018年比)



水とともに歩む

～「水づかいワークショップ」で未来を考える～

ミツカン創業以来、「水」によって育まれてきた企業です。お酢づくりに欠かせない水、そして人々のいのちを支える自然。その大切さを未来につなげていくことは、私たちにとって欠かせない使命です。その想いを社員一人ひとりが自分ごととして考えるために、三木工場敷地内のビオトープにて「ミツカンの水づかいワークショップ」を開催しました。

三木工場のビオトープ～自然と人が共生するフィールド～

自然との調和と共生を目指して、兵庫県三木市吉川町に約12ヘクタール（東京ドーム約2.5個分）の大規模なビオトープ*を開設しています。このビオトープは「自然環境を守る」だけでなく、周囲の生態系のバランスを整えることで、隣接する工場の安全で清潔な環境づくりにも役立っています。つまり、自然と工場、両方を守る役割を果たしているのです。このビオトープは単なる自然の保全の場にとどめず、地元のボランティアの方々と一緒に活動する場としても開放しています。

*「ビオトープ」は“Bio（生き物）”と“Top（場所）”を組み合わせた言葉です。動植物が自然に近い形で暮らせるようにつくられた生息空間を指します。



水づかいワークショップ

社員一人ひとりが日々の業務や生活の中で、少しでも水の使い方を見直すきっかけになることを目指し、ワークショップを開催しました（2025年7月）。

事前のオリエンテーションでは、「廻船で半田から江戸へ酢を運搬したこと」「良質な水を求めて私設の木製水道を敷設したこと」など、ミツカンの水との関わりの歴史や三木工場での水の利用方法について学びました。

当日は参加者に三木工場に集ってもらい、三木工場の水の管理やビオトープの見学、ワークショップを実施。ワークショップではミツカンの事業特性を活かしつつ、ビオトープを活用した社会貢献につながる企画を考えてもらいました。

自然を保全することで、人と社会と地球の健康に貢献することができると考えています。美しい自然を、豊かないのちを、未来へつないでいくために、これからもミツカンらしく「水」から自然を見つめていく取り組みを継続していきます。

環境の重要課題

03 資源を無駄なく使う

- ・使用資源のサステナブルな利用、開発（原料、容器）
- ・社員の3Rの浸透
- ・事業、家庭での食品ロス削減

目標

資源循環に関するグローバルの動きを注視しながら、事業活動を行う各国・地域の法令・規制に則った各エリア目標を設定しています。

日本国内拠点

- ・2030年までに生産拠点での
廃棄物排出量原単位
20%削減（2018年比）
- ・2030年までに製品廃棄量※
80%削減（2018年比）

※製品在庫が賞味期限切れ等で提供できなくなり廃棄した量



フードロス削減を「酢飯」で実現！ ～「もったいな稲荷」全国の『おひつごはん四六時中』で販売～

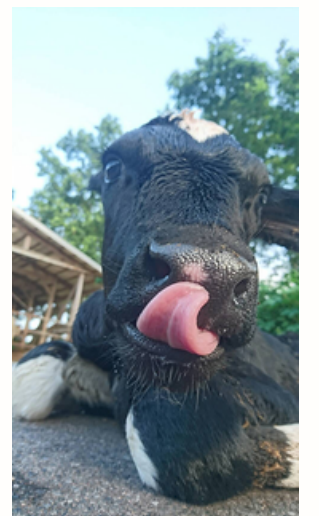
レストラン『四六時中』を展開する株式会社イオンイーハートと共同で、営業終了後に廃棄されるごはん（約7t/月）に注目し、フードロス削減のために「もったいな稲荷」の販売を行っています。営業終了後に余ったご飯と「カンタン酢」を合わせ、一晩寝かせてマイルドな味わいに仕上げたオリジナルの稲荷寿司を開発しました。

この取り組みは、廃棄ごはんをおいしい商品として生まれ変わらせることで、食品ロス削減と環境への貢献を両立しています。



食酢づくりの副産物を“もったいない”で終わらせない ～糖化粕を乳牛の飼料に再利用～

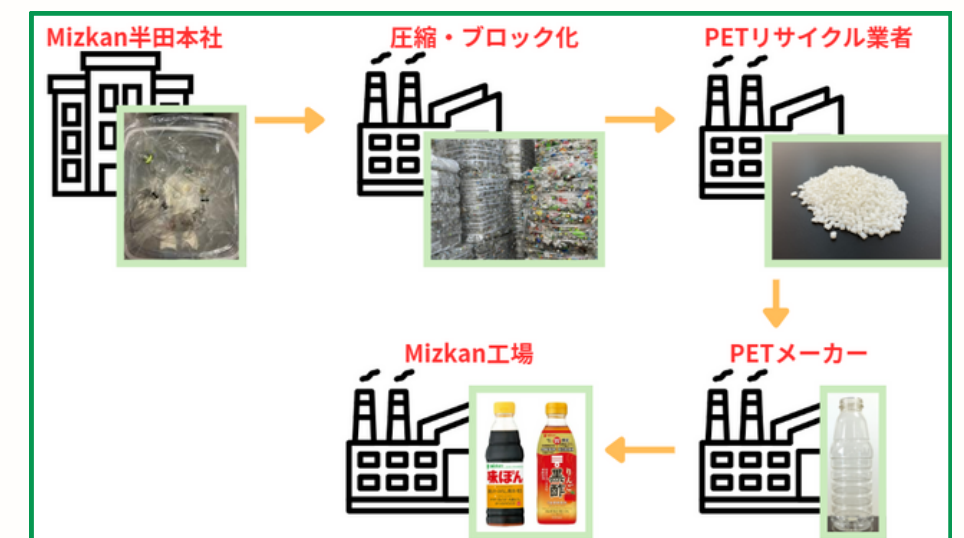
大阪工場では、食酢の製造工程で発生する発酵残さ「糖化粕」を廃棄せず、“飼料”として再活用する取り組みを開始しています。そして、この糖化粕は2025年3月から鳥取県の(株)ブッシュクローバーズ（酪農場）へ出荷され、乳牛用飼料として活用されています。



飲み終えたボトルが、またMizkanの商品に！？ ～ペットボトルの水平リサイクル～

商品容器へのリサイクルペットボトルの導入を進めておりますが、2024年6月から本社オフィスで社員が使用・排出したペットボトルも回収、リサイクルを行い、再び自社商品に使う「水平リサイクル」をスタートしています。

社員が飲み終えた後に、キャップやラベルをきちんと分別するよう意識づけを行うことで、資源循環への意識を高めるとともに、適切に回収されたペットボトルは、再びMizkan商品の容器として生まれ変わっています。



環境に配慮した商品開発

Topics

1

ペットボトルの 水平リサイクル に関する協定

“ボトルtoボトル”で未来につなぐリサイクル ～栃木市×協栄産業グループ×Mizkan～

栃木市・協栄産業株式会社・ジャパンテック株式会社と連携し、ペットボトルの水平リサイクルに関する協定を2024年10月31日に締結しました。

この協定では、栃木市で回収された使用済みペットボトルを原料に、再びペットボトルとして生まれ変わらせる“ボトルtoボトル”リサイクルを進める仕組みを構築し、新たな化石資源の使用を抑え、CO₂排出量を最大約60%削減することが可能となります。このリサイクル原料を自社製品の一部容器に活用していくことで、循環型社会の実現に貢献していきます。



混ぜやすい！持ちやすい！しかもエコ！新納豆容器への挑戦 ～株式会社コバヤシ×Mizkan 共用品推進機構理事長賞を受賞～

「持ち手がなく持ちにくい」「納豆があふれて指が汚れる」「箸でトレーを突き破ってしまう」など普段納豆を食べる人の声をもとに、使いやすさと環境へのやさしさを両立させた新たな納豆容器を開発しました(2025年9月～)。

これまでは側面・底面に凹凸があり、これは強度や発酵影響の面から必要不可欠と思われていましたが、フラットな容器にすることで使いやすいだけでなく、強度が高く、発酵品質も変わらないことがわかりました。さらに、「プラスチック159t/年 削減」「CO₂ 958t/年 削減」と環境にもやさしい容器となりました。このトレーは、使いやすく、環境にも配慮された点が高く評価され、2025年の「日本パッケージングコンテスト」で最高賞のひとつ「共用品推進機構理事長賞」を受賞しました。

これからもお客様の声を大切にしながら、日常の使いやすさと環境配慮を両立させた、より良い商品開発に取り組んでいきます。

[納豆の容器が新しくなりました！ | ミツカン 納豆のブランドサイト](#)

Topics

2

新納豆容器 プロジェクト



その他の取り組み

Topics

1

フードバンク団体 との取り組み

地域社会の食品ロス削減や支援活動の一環として、2023年5月からフードバンク団体への定期的な商品提供を行っています（2024年度は1,368 c/s提供しました）。しかし、単なる物資の寄贈にとどまらず、2024年4月からフードバンクの抱える課題解決にも積極的に貢献しています。

フードバンク団体の中には、冷蔵・冷凍食品を安全に扱うための衛生管理や温度管理の知識が不足しているところもあります。そこで、自社の食品メーカーとしての専門的なノウハウを活かし、寄贈された食品の適切な温度管理について調査を実施しました。その結果をもとに、実践的な温度管理ガイドを作成し、フードバンク団体に提供しました。



Topics

2

地域貢献

半田市内の小学校への出前授業 (2024年~)



本社周辺の清掃活動 (2024年9月~)



水平リサイクル協定を結んでいる 武豊町の小中学生向けワークショップ (2024年8月)



Topics

3

京都市 との取り組み

京都市主催のエコバスツアー内で 使い切りクッキング体験を企画 (2025年8月)



京都工芸繊維大学での講義・ 食品ロス削減イベント協賛 (2025年5,6月)



JA京都中央 様との 食品ロス削減イベント (2024年9月)



重要課題

1

CO2排出量

実績

CO₂排出量 2024年：37,674 t
(2018年比 33%減)

再生可能エネルギーの活用を開始したことで2018年度から減少傾向となっています。
今後につきましても、生産工程の改善、省エネ設備への更新などを継続的に推進していきます。

重要課題

2

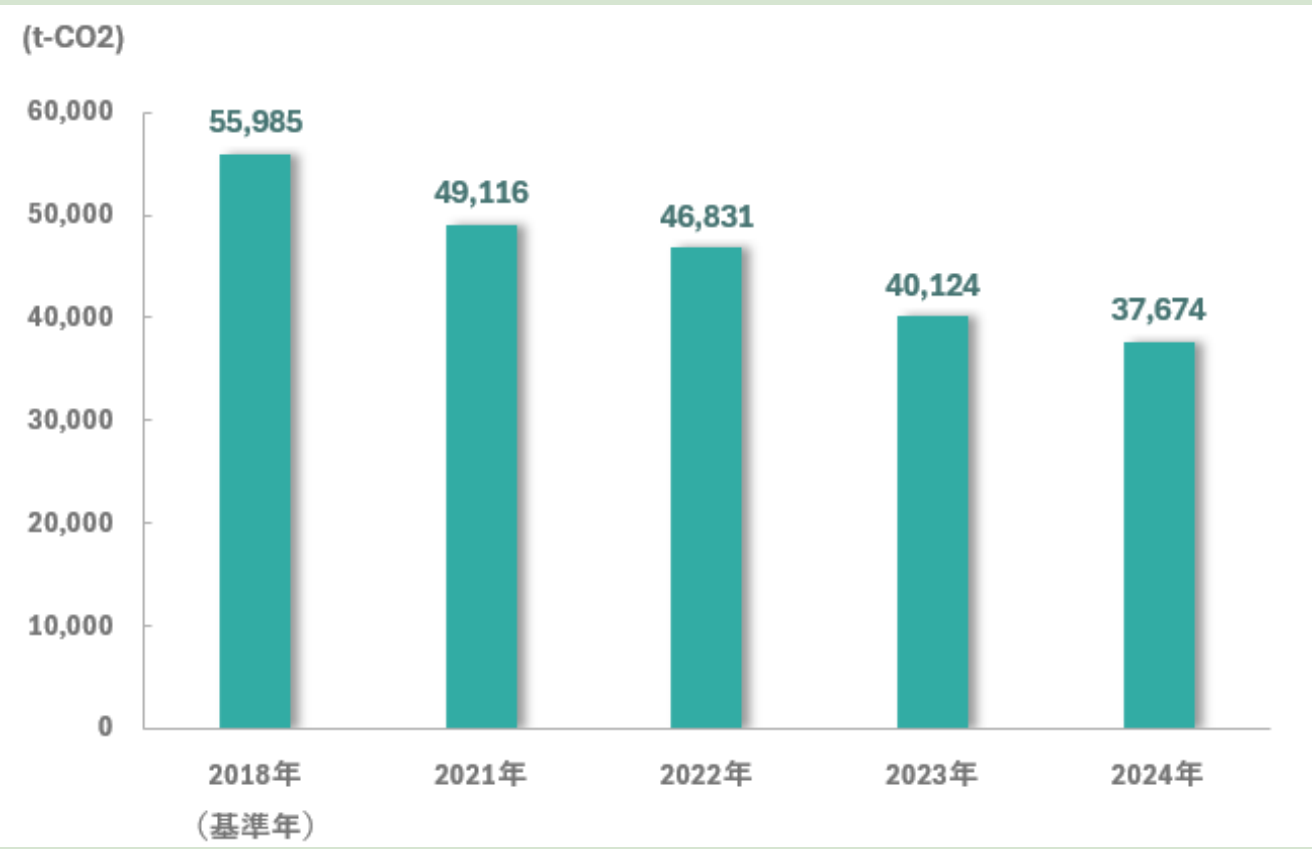
水の使用量

実績

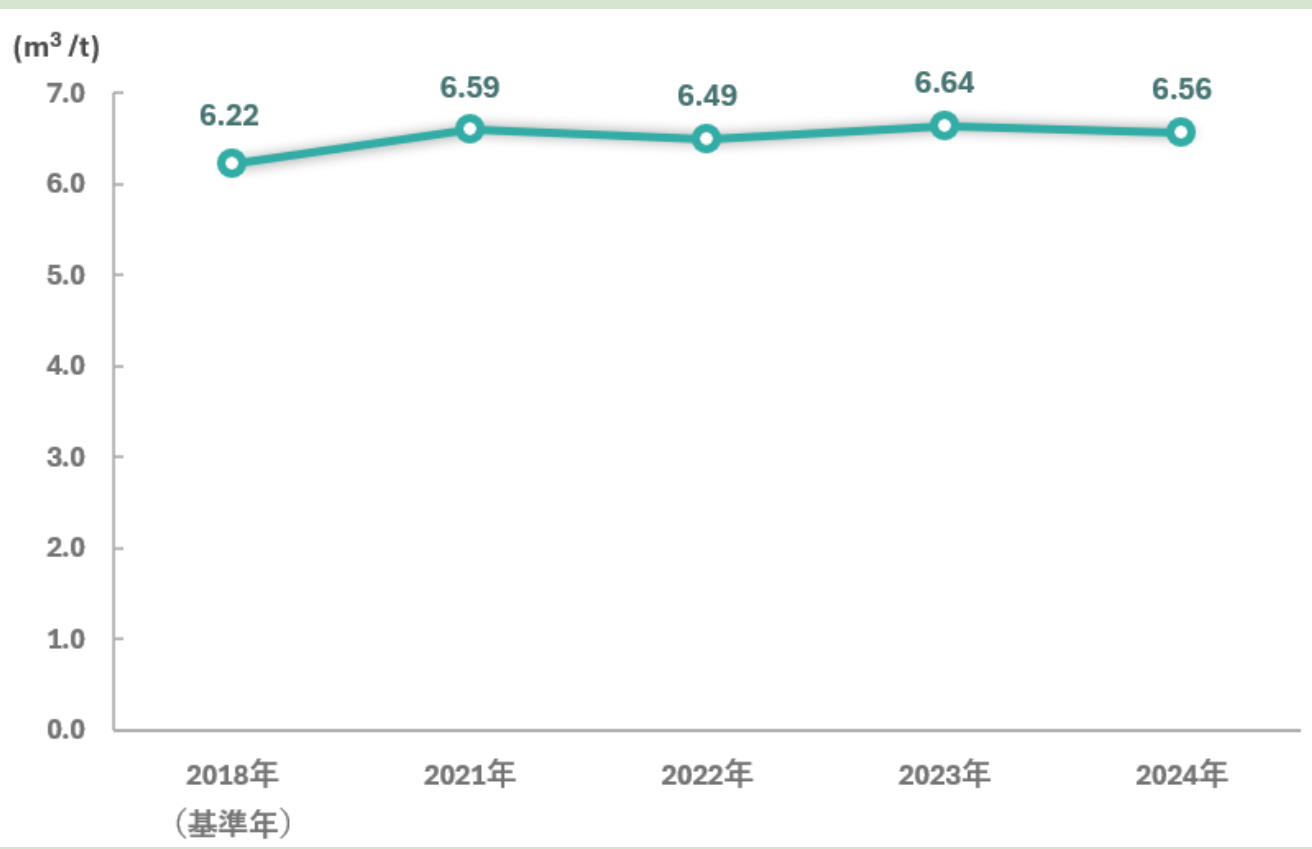
水使用量原単位 2024年：6.6 m³/t
(2018年比 5%増)

生産数量の減少により、2018年度と比較してわずかに増加傾向となっています。
今後につきましても、効率的な水の活用に努めます。

国内生産工場、オフィスでのCO₂排出量 (Scope1,2)



水使用量



重要課題

3

廃棄量

実績

- ・ 廃棄物排出量原単位 2024年：26.5 kg/t
(2018年比 11%減)

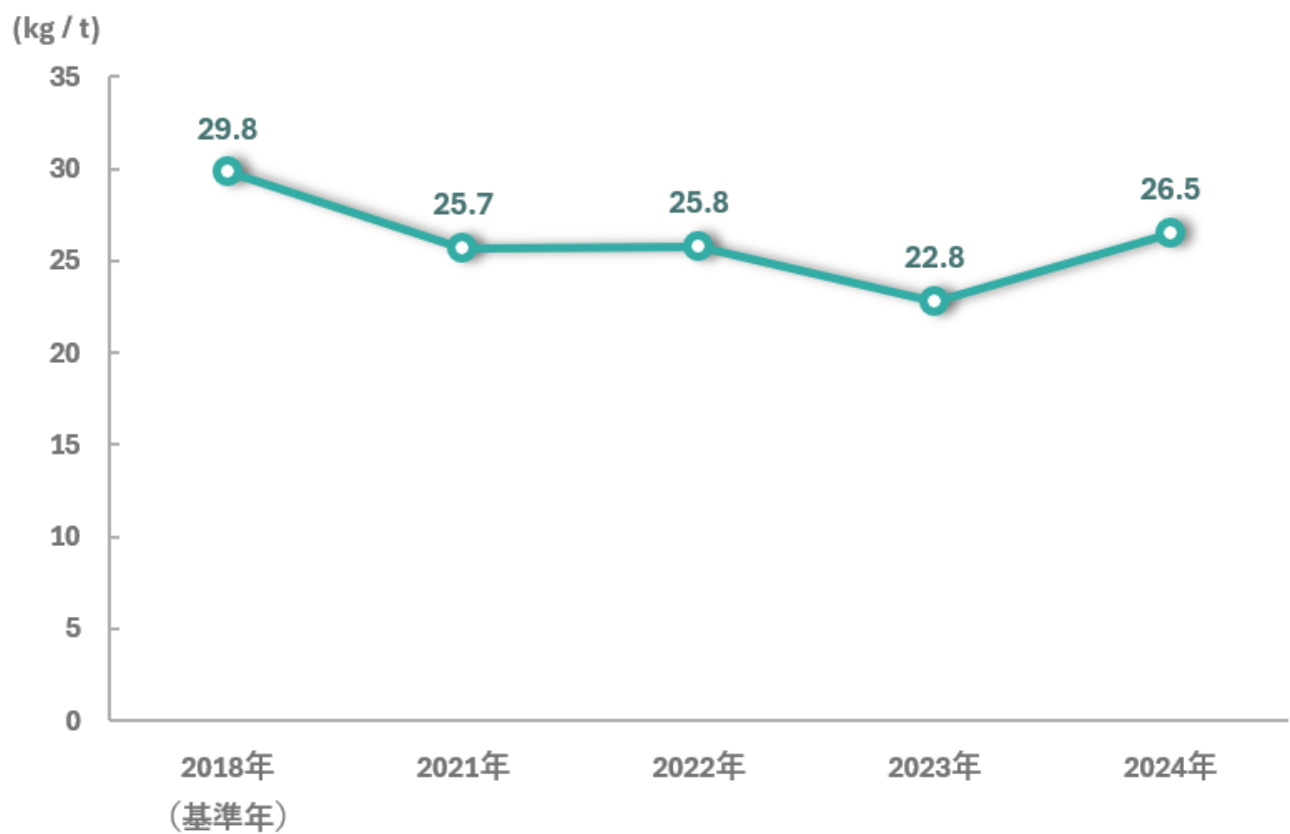
2024年度は美濃加茂工場での排水処理負荷の高まりにより汚泥が増加したことで、生産拠点での廃棄物排出量が増加傾向となっているものの、2018年度比では減少しております。

- ・ 製品廃棄量 2024年：239 t
(2018年比 77%減)

販売予測精度の向上により、2018年度から減少傾向となっています。

今後につきましても、販売予測精度の向上と共に、お取引様にもご理解を頂きながら排出量の削減に努めます。

生産拠点での廃棄物排出量



製品廃棄量

